

Title	契約主義の二つの根拠
Sub Title	Two bases of contractarianism
Author	森, 庸(Mori, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1994
Jtitle	哲學 No.97 (1994. 7) ,p.65- 88
JaLC DOI	
Abstract	The fundamental thesis of contractarianism is that social norms must be based on the agreement of the people. Contract theorists present two different bases for this thesis. The first is the expectation that each person, who is presupposed to be a utility maximizer, reaches his highest utility level when he coordinates his actions with others according to norms both parties can voluntarily accept. But this cannot be supported, because people have conflicting and incompatible preferences. The second basis is the equality of people; that is, the recognition that people are similar beings and that none of them is superior to anyone else. Contractarians assume, on the basis of equality, that although people are different in particular abilities and talents, they have similar general capacities for comprehending human nature and the world, and the relations between these; therefore, each person can claim the equal right to judge how people ought to live and how the society should be. I think that citizens in modern democratic societies approve, or will approve after due reflection, this contractarian assumption of equality, because this is essential to endorsing our basic liberties, for example, the freedom of expression. If we regard ourselves as being equal in this respect, we have no choice but to determine social norms by agreement.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000097-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

契約主義の二つの根拠

森

庸*

Two Bases of Contractarianism

Yasushi Mori

The fundamental thesis of contractarianism is that social norms must be based on the agreement of the people. Contract theorists present two different bases for this thesis. The first is the expectation that each person, who is presupposed to be a utility maximizer, reaches his highest utility level when he coordinates his actions with others according to norms both parties can voluntarily accept. But this cannot be supported, because people have conflicting and incompatible preferences.

The second basis is the equality of people; that is, the recognition that people are similar beings and that none of them is superior to anyone else.

Contractarians assume, on the basis of equality, that although people are different in particular abilities and talents, they have similar general capacities for comprehending human nature and the world, and the relations between these; therefore, each person can claim the equal right to judge how people ought to live and how the society should be.

I think that citizens in modern democratic societies approve, or will approve after due reflection, this contractarian assumption of equality, because this is essential to endorsing our basic liberties, for example, the freedom of expression. If we regard ourselves as being equal in this respect, we have no choice but to determine social norms by agreement.

* 横浜国立大学非常勤講師 (倫理学)

近年、英米の倫理学・政治哲学の分野では社会契約論の復活とでも呼ぶべき現象が起こりつつあるように思われる。このきっかけとなったものはいくつもなく 1971 年のロールズの『正義の理論』である。これ以後、道徳や法などの社会規範の正当性の根拠を、人びとの間の合意に求めようとする論文や著作が相次いで発表されている。

ところが、20 世紀前半の倫理学がもっぱらメタ倫理学をめぐって展開された反動のためか、近年の契約主義者の議論の中心は社会的・道徳的規範の実質的内容に向けられている。契約主義の根拠、すなわち、なぜ社会的規範は人びとの間の契約あるいは合意によって決められなければならないのか、という問題は十分には論じられていないようである。

さて日本では、英米における契約主義の復活に関心を向ける人はきわめて少ない。例えばロールズの正義理論を契約主義の観点から解釈しようとする論者は決して多くはない。現代においては社会的規範の正当性は人びとの間の合意に求める以外に道はない、と考える私にとってこのような状態は憂慮すべきことのように思われる。契約主義に対する日本人のこのような態度は、契約主義の基礎もしくは根拠が十分明きらかにされていないことにもその一因があるのではなかろうか。そこでこの小論では、現代の契約理論の中に契約主義の根拠を探ってみることにしよう。

1

契約主義理論にもさまざまなタイプのものがあるが、私が構想している契約主義は、道徳や法などの社会的規範はその社会の成員の同意によって決定されねばならない、と主張する。したがって契約主義は、第一義的には規範の正当化の手續きに関する理論であって、必ずしも実質的な内容を持つものではない⁽¹⁾。規範の具体的内容はその合意に参加する人びとの欲求や願望や信念・人間観等によって決定されねばならない。人びとの欲求や信念等が変われば、その社会規範の内容も変わるであろう。

古典的な社会契約論、特にロックの理論は私有財産制、市場経済、議会制民主主義を理論的に支える役割をはたした、としばしば言われる。しかし契約主義とそのような社会制度の間には必然的な関連性はないように思われる。ロックに私有財産制や資本主義を擁護させたのは社会契約論だったというよりは、その背景にあった彼の自然法ならびに自然権思想であったと言うべきであり⁽²⁾、また契約主義はロックの自然法思想のみから導き出されるわけではない。さらに仮にロックの自然法・自然権を前提したとしても、富の無制限な蓄積を放任し、貧富の限りなき拡大を認めるような社会制度に人びとが同意するかどうかには大いに疑問の余地がある⁽³⁾。

契約主義と功利主義は、しばしば対立的に論じられるが、常に対立するわけではない。仮に人びとが社会の規範として功利原理を選択するならば、功利主義と契約主義は両立しうることになる。その可能性があるからこそロールズは、原初状態において功利主義が選択されるか否かを考察しているのである。またある種の契約主義者と考えられなくもないハーサニは、合理的な人間は功利原理を選択するであろうと推論している⁽⁴⁾。(塩野谷祐一は私と同様に契約主義を、道德原理を導くための形式的方法と考えつつも、しかし「功利主義が依拠している同感の理論は社会契約論と対立する別個の方法である」と述べている⁽⁵⁾。塩野谷の言う功利主義が次に述べる哲学的功利主義ならばその通りであろう。だが全ての功利主義が同感に依拠しているわけではない。合理的な選択の結果としての功利主義もありうる。例えば、自分が将来どのような境遇になるか判らない状況で、自分の幸福なり快樂なりを最大化する合理的な方策として人びとが一致して功利原理を選択することもありうる。ハーサニの議論の一部をそのように解釈することも不可能ではなかろう。合理的な契約論者は、道德原理の少なくとも一部として功利原理を選択するであろうと私は推測しているが、ここでは実質的な問題に立ち入る余裕はない。)

功利主義にもさまざまな型のものが考えられるが、根本的な功利主義

(スキャンロンの言葉を使えば、哲学的功利主義⁽⁶⁾) は契約主義と鋭く対立する。哲学的功利主義者にとって、行為や規範を決定する際にもっとも重視すべきもの(再びスキャンロンの表現を借りれば道徳的事実)は幸福や快樂、欲求の充足などである。彼らにとって、幸福や快樂は、たとえそれを直接的に享受するのが自分自身ではないとしても、おそらくは直覺的にそれ自体として善いもの、望ましいものである。これに対して契約主義者は、我々が行為もしくは規範を決めるときに重視すべきものは、その影響を受ける一人ひとりの人間の同意であると考えている。

契約主義者はなぜ、行為や規範は単に自分の選好あるいは社会の多数者の選好(選好のなかには自分は何らかの意味で善い・正しいと信じる事柄も含まれる⁽⁷⁾)によって決めるのではなく、人びとの合意によって決定されねばならない、と主張するのであろうか。このような契約主義の根拠という観点から見ると、現代の契約理論はごく大雑把に言って二つの立場に分けられるように思われる。第一の立場に立つ論者としてゴティエ、ナーブソン、マッキー、ブキャナン、ハーマン等が挙げられる⁽⁸⁾。第二の立場に属するものとしてはロールズ、スキャンロン、ディグズ、ノズィック、レイマン、ハンプトン等がいる⁽⁹⁾。以下では二つの立場を代表する論者としてそれぞれゴティエとロールズを取上げ、彼らが契約主義の正当性の根拠をどこに求めているかを検討してみたい。

2

ゴティエは契約主義の正当性の根拠を目的合理性に求める。すなわち、合意によって社会を形成するとき各人の選好達成度は最も高くなるであろうがゆえに社会的規範を契約によって決めることは正しい、というのである⁽¹⁰⁾。

ゴティエが前提としている人間は、自らの選好が実現されている割合(これをゴティエは効用と呼ぶが、だからといってゴティエならびに彼が

前提としている人間が功利主義者というわけではない) を可能なかぎり高めることを目指して行動する人間である。したがってゴティエが想定している人間にとって、選択や行為のもっとも基本的な正当化は自分自身の選好の観点からなされねばならない⁽¹¹⁾。そのような人間が何故、行為や規範を決める際に、自分がそれに納得できるかどうかだけでなく、他人もまたそれに同意しうるかどうかにも配慮しなければならないのであろうか。それは、他人を無視して自分の利益のみを目指して行為するのではなく、お互いに納得できる規範にしたがってお互いの行為を規制し合った方が自分自身の効用が高くなるからである⁽¹²⁾。

たしかに我々の大半は自らの欲求や願望、理想をできるだけ多く実現することを目指して行為していると言ってよかろう。したがって、自発的な合意に基づいて社会を形成した方が、各人が孤立して生きる場合よりも、また他の手段で社会を形成する場合よりも、その目標にとってふさわしいということになれば、人びとは契約主義の考えを受入れるであろう。だがはたして自発的な同意によって形成された社会の方が、我々の選好をより多く実現するのにふさわしいと言えるであろうか。

そのように主張するためにゴティエは二つの前提を立てている。第一に、人びとは選好を実現する能力の点で対等である⁽¹³⁾ (理性なるものをあくまで選好を実現する道具として捉えるゴティエは、これを「平等な合理性」と呼んでいる)。したがって、各人がそれぞれの能力を十分に発揮するとき、強制的な支配・服従関係は成立しえない。第二は人びとが持つであろう合理的選好の内容に関する前提である。ゴティエの合理的選好とは、各人が関連ある情報や知識を十分考慮したときに持つにいたる選好であって、その内容は何であってかまわない。しかしゴティエは、人びとがそのようにして持つであろう選好に関してある種の推測を立て、その上に議論を進めている。その推測によれば、人びとは他人に無関心 non-tuistic であり、その合理的な選好は、外的な事物を消費したり所有することによ

って実現されるような類のものである⁽¹⁴⁾。したがって、合理的人間は他人の行動や社会のあり方に関心を持つことはない。

たしかに、これらの前提が満たされるならば、合意による社会において人びとの選好充足度はもっとも高くなると言えるであろう。合理的な欲求を満たすのに必要な外的事物の生産は、社会的協力（例えば分業）によって飛躍的に増大することは、歴史に照らして明きらかである。一方、能力的に対等なのであるから強制によってそのような協力関係を長期にわたって安定的に維持することは不可能だからである。

ではこの二つの前提は妥当なものと言えるであろうか。

人びとが能力的に概ね対等であるということを認めるとしても、このことから直ちに、強制的に支配することが不可能ということになるだろうか。現実には至るところで支配服従の関係が見られるではないか。これに対してゴティエは次のように答える。合理的な能力は各人に平等に与えられているのだが、歴史上の偶然的要因のために、一部の人々においてその能力の開発が妨げられてきたためにそのような関係が維持されてきたのである。これからそのような阻害要因が徐々に取除かれることによって人びとの合理的能力は平等になっていくであろう⁽¹⁵⁾。

しかし一人ひとりの人間が能力的に平等だとしても、何らかの点で共通性・親近性を有する人々が集団を形成することによって強制的な支配が可能となりうるのではないか⁽¹⁶⁾。これに対してゴティエは次のように答えるであろう。たしかにそのようにして強制的な関係が可能となるかもしれない。しかしそのような関係が可能であったとしても、それを自発的な協力関係としての社会に変えた方が、支配していた人々にとっても有利なのである。というのは強制的な関係においては、支配されている人々はそれぞれの能力を十分には発揮しようとはしないからである。お互いに納得できる条件で協力し合うとき、強制的な関係を維持するための費用が不要となるのみならず、服従されていた人々もその能力を存分に発揮して協

力に参加するようになり、結局は支配していた人々の効用もさらに高まるであろう⁽¹⁷⁾。このように強制的な支配が全く不可能ではないとすれば、人びとの合理的選好に関する前提こそが、契約主義の根拠をめぐるゴティエの議論において、より基本的な役割を果たしていることになる。

だがこの第二の前提には多くの論者が疑問を呈している⁽¹⁸⁾。はたして我々は他人に無関心で、また我々の欲求や願望は単に事物の消費や所有によって実現されるようなものばかりであろうか。たしかに欲求のかなりの部分はそのような欲求だとしても、そうでない欲求も決して少なくないのではないか。我々の多くが他人の行為や生き方、あるいは社会全体のあり方に関しても何らかの選好を有しているのは明きらかである。しかもそのような選好あるいは理想の実現が、人生目的の主要な部分を成しているという人々も決して少なくはないように思われる。

合理的選好の内容に関する想定があまりにも非現実的であるという批判に直面したゴティエは結局、その想定を修正するにいたっている⁽¹⁹⁾。すなわちゴティエの議論にとっては、人びとの合理的選好がいわゆる囚人のディレンマをもたらすような構造になっているということだけで十分であり、合理的選好についてのそれ以上の前提は不必要である、というのである。つまり、人びとが置かれている状況は、協力し合えばそれなりの効用が得られるにも拘らず、お互いに相手を出し抜いてさらに高い効用を得ようとするならば共倒れになってしまうような状況である。たしかに人びとの間の対立のかなりの部分はそのような状況から生じていると言ってよからう。このような状況においてはゴティエの主張は妥当性を持つであろう。

しかしはたして、現実の対立はそのようなものに尽きるであろうか。今日、鋭い対立をもたらしている人びとの選好の対立はそれよりもむしろ、いわゆるゼロ・サム（零和）ゲームをもたらすように思われる（文字通りのゼロ・サムゲームではないが）。つまり、人びとの選好が本質的に相対立するがゆえに、相手の利得は必然的にこちらの損失を意味するような状

況である。現実には深刻な問題をもたらしているのは、人びとが両立不可能な欲求や願望や目的を抱いているという事実なのである。例えば、鯨の肉を食べたいという人間がいる一方で、捕鯨に反対する人間もいるかと思えば、中絶に絶対反対を唱える人々に、生むか生まないかを決めるのは本人の権利であると譲らない人々が対立している。

ゴティエが言うように、人間が制度や規則に従う程度が、そうすることによってその人の選好が満たされる割合によって決まるものと仮定しよう⁽²⁰⁾。その場合には、重要な部分においては本質的に相対立する選好を有する人びとが合意によって社会を形成するとしても、彼らがその合意を遵守することは期待しがたいと言わざるをえない。なぜならば、そのとき彼らの選好が実現されている割合はかなり低いと考えられるからである。

例えば、ある一定の秩序にしたがった社会を実現したい、という強い選好あるいは願望を抱いていて、その理想の実現が主要な人生目的となっている人たちがいるとしよう。彼らにとって、そのような理想を共有しない人々との合意による社会の形成によって、選好実現度が十分に大きなものとなると言えるであろうか。たしかに、社会の形成によって安全に生きていくための最低限の条件は確保されるであろう。しかし異なった選好を有する人々の合意である以上、その社会が自分たちの理想どおりに形成されるはずはない。つまり、彼らの主要な目的である願望の実現はほとんど達成されていないままであろう。彼らにとって、合意から得られる効用はそれほど大きいものではなかろう。ここで仮にゴティエの第一の前提、すなわち、人びとは知的・肉体的能力の点で平等であるということを認めて、力関係からやむをえず合意による社会を受入れざるをえなかったとしても、彼らはその社会契約を誠実に履行するよりは、状況を隙あらば自分の理想の実現に有利なように変えようとするのではあるまいか⁽²¹⁾。というのもゴティエが前提としている人間にとって、他の人たちとの合意それ自体には何の価値もないからである。合意には、それぞれの目的を達成するため

の手段としての価値しかなく、人びとの行為を規制する独自の力を持ちえないからである。

さらに事態を紛糾させるのは、自分の選好ないしは価値を正しいもの、それに反する選好ないしは価値を間違っているものと信じている人々が少なからず存在するという事実である。そのような人たちは契約主義を受入れようとはしないであろう。彼らは直覚的に、あるいは、他人には理解しがたいものとしても彼らなりの理由で、自分たちが信奉している価値を正しいと信じている。彼らにとってその価値や秩序は全ての人間が従うべきものであって、それを拒否する人は間違っているのである。そのような価値や秩序を認めない人は、そもそも人間の本質あるいは世界を誤って認識しているのであるから、そのような人の欲求や選好・願望には何の価値もない。またそのような人々との合意にも、とりあえず生きていくためのやむをえざる妥協の産物としての価値以上のものは何もない。そのような契約を誠実に履行することは、かえって人間の義務に反することである。要するに、特定の種類の選好を何らかの意味で正しいと信じ、それに反する選好は誤っていると考える人たちにとって、すなわち、何らかの単一の絶対的な、あるいは客観的な価値や秩序の存在を信じている人々にとって契約主義の主張は、誤った選好をもある程度実現させるために、正しい価値や秩序の完全なる実現を放棄することを要求するものであり、とうてい受入れ難いものであろう。

そこで契約主義者の多くは道徳的絶対主義あるいは客観主義を否定することになる⁽²²⁾。ゴティエによれば、客観的な価値や秩序という考えは目的論的な世界観から生まれた思想である。ところが現代の物理学や生物学の急速な発達 は 目的論の否定によってもたらされた。つまり、目的論を否定することによってかえって自然界の多くの現象を整合的に説明することが可能となった。それゆえ目的論的世界観の妥当性は根底からゆらいであり、したがって、それに基づく客観的な価値や秩序の存在も否定せざるをえな

い、とゴティエは主張する⁽²³⁾。

しかし仮に、そのような契約主義者のひとりであるマッキーが言うように、古典ギリシャ以来の大半の哲学者、ならびに現代においても多くの人びとの規範的意識が、世界あるいは宇宙の構造の中に組込まれた秩序もしくは価値への信念に支えられているとすれば、またハーマンも認めているように、道徳的絶対主義の根強さを考えれば、道徳や価値の客観的実在性をゴティエなどのように簡単に否定できるものかどうか疑わしいと言わざるをえない。

このように、合意によって社会を形成するときに自らの効用が最大となる、という理由で契約主義の主張を受入れるためには、人びとの選好の主要な部分が両立不可能なものであってはならない。ところが、多くの人々が社会全体のあり方や、他人の行為や生き方に関する選好を持ち、しかもそれらが矛盾し相対立している。さらにはかなりの人々は、自分の選好こそが正しく、それと矛盾する欲求や願望は間違っていると信じ込んでいるというのが現実なのである。だとするならば、契約に基づく社会においても多くの人たちの効用が低水準に留まることが予想され、したがって契約主義も根拠を失うことになるだろう。

3

次にロールズの契約主義理論を見てみよう。ロールズは自らの理論を、理想基底的理論 *ideal-based theory* であると説明している⁽²⁴⁾。すなわち、彼の〈公正としての正義〉は、公正な協力システムとしての社会、自由で自発的な支持に基づく社会という理想の実現を目指した理論だということである⁽²⁵⁾。そして二次的な理想として、自由で平等な存在としての人間を挙げている。しかし私はこの序列を変えた方がよいと考える⁽²⁶⁾。すなわち、まず各人は自由で平等な存在であるという信念もしくは理想が根底にある。このような信念が根底にあるからこそ、強制に基づくのではなく、

自発的な支持による公正な社会が理想として要請されることになる。このように考えた方がロールズの契約主義は理解が容易になると思う。『正義の理論』以後ロールズの考えが変わったのかどうかに関してはさまざまな解釈があり、近年の論文ではそれまでとは全く異なった正当化の議論が使われていると指摘する論者もいる⁽²⁷⁾。しかし〈公正としての正義〉を理解する際に重要なことは、契約主義の枠組の中である特定の道德原理を正当化する議論と、契約主義そのものを正当化する議論を区別することである。『正義の理論』においては前者の議論が中心であり、そこでは断片的にしか論じられていなかった後者の議論が近年の論文では中心となっているのである。したがってロールズの議論は継続性を持っていると私は解釈する。但し、前者の議論で使われていた「合理性としての善」の観念が、おそらくは強すぎる前提としてかなり修正されている点は指摘されている通りであろう⁽²⁸⁾。)

では自由で平等な存在とは何を意味しているのでしょうか。また自由と平等がともにロールズの契約主義の根拠となっているのでしょうか。

社会契約論は自由に生きる平等な権利を基礎にしている、と言われることがしばしばある⁽²⁹⁾。だが、自由に生きる平等な権利から契約主義を導き出すには二つの難点があるように思われる。

第一に、行為や規範が正しいものであるためには、少なくとも、人間とそれを取り巻く環境に関する、できるだけ正確な理解に基づいて行なわれねばならないであろう。ところが、自分の生き方を決定する権利を各人が有するとしても、我々とその外界を正しく理解する能力の点で、もし仮に人びとが対等でないとするならば、人間と外界をより正しく理解している人々が、その点で劣っている人々にとって代わって彼らのために決定を下してやり、強制的にその決定を実施することが間違っているとは言えないことになろう。また、各人が自分自身の生き方を自由に決めるのは認められるとしても、社会規範を、認識能力の点で劣った人々をも加えた全員の

契約主義の二つの根拠

合意によって決定するということは、彼らの誤った事実認識によって他の人びとも何がしかの制約を受けるということの意味する。これは受入れがたいという理由で、契約主義に異議を唱える人も考えられる。このように、人間と世界を認識する能力に関して人びとの間に優劣の格差があると仮定するかぎり、自由に生きる平等な権利から契約主義を導き出すことはできないであろう。

第二に、自由に生きる権利をどのようにして正当化することができるであろうか。このような権利を否定し、我々は自由ではなく、生まれながらにある一定の義務もしくは秩序の下にあるのだ、と主張する人々も存在する⁽³⁰⁾。すでに見たようにゴティエはこのような価値実在論を否定し、各人にとっての価値をそれぞれの選好に基礎づけるところから彼の契約理論を始めている。これに対してロールズは、容易に決着のつきそうにない実在論と主観主義の論争に介入することを極力、避けようとしている⁽³¹⁾。実質的な道德規範の探求としての道德理論を、道德哲学の他の分野、すなわち認識論、パーソナル・アイデンティ、意味の理論などからは独立して進めることを意図しているロールズとしては、ゴティエのような立場は取りえない⁽³²⁾。

ではロールズの契約主義の根拠は何なのであろうか。ロールズの自由とは、何ものにも拘束されていない状態を意味する自由ではなく、社会に対して自らの判断にしたがって要求を提出する資格を有する、という意味における自由である⁽³³⁾。そして人びとがそのような意味で自由なのは、各人が道德的能力ならびに推論・思考・判断能力を有するからである⁽³⁴⁾。仮にそのような能力が平等でないならば、人びとを、ロールズが言う意味での自由とは言えないであろう。

したがって、ロールズの契約主義の根底にあるのは自由よりむしろ平等である、と私は考える⁽³⁵⁾。すなわち、表面的にはさまざまな相違があるとしても、他の人たちを本質的には自分と同じ種類の人間である、と認める

ところから契約主義は始まる⁽³⁶⁾。つまり、自分を他の人間とは違った特別の存在とは考えない。したがって、人間や世界について理解し推論し判断することに関しても、同じような能力を、特にその中心としての理性を持っている、と考えるのである⁽³⁷⁾。ゆえに我々は、物事の価値をめぐる判定に関しても同等の能力や資格を有している。したがって例えば、行為の善し悪しを判断するさいに、一方的に他人から指示・命令されるべき理由はない。この意味において我々はお互いに自由なのである。

このように、行為や制度の正・不正について判断する能力を持っていると自負しつつ、同時に他の人びとにも同等の能力があることを認めている人たちはどのようにして社会的規範を決定するであろうか。まず各人は自分なりに社会のあるべき姿を思い描くであろう。これが一致するか、自ずから調和するならば何ら問題は生じない。問題は人びとの意見が対立するときである。一部の人々が他の人々の意見を無視して彼らにある規範を押しつけるとすれば、押しつけられた人々の平等な能力や資格を否定したことになる。お互いが対等な存在であることを認めるならば、ともに受入れることのできる規範を合意によって見つけ出す、もしくは決定する以外にないであろう。

ところが、どのような人生が生きるに値する人生かについて人びとの判断がさまざまに異なっているのであれば、それぞれの判断にしたがって自由に生きていく権利をお互いに与え合うことでひとつの合意が成立するであろう。これがロールズの正義原理の第一原理として表現されている。このように自由に生き方を決定する権利は契約主義の基礎というよりは、人びとの間の契約によって認められるものである。

しかしながら、このように平等を、能力などの自然的属性における平等性を根拠とすることに関しては、それは事実と反するという反論が予想される。これに対してロールズは次のように答える。たしかに人びとは能力等の自然的属性の点で異なっている。社会的協力が有意義で有益なものと

なる一因はそれであろう。しかし人びとが平等と認められるためには全く同一の性質を持つ必要はなく、ある一定の範囲内の性質を持っていればよいのである、と⁽³⁸⁾。

だが私としてはこの反論に次のように答えることもできるのではないかと考える。人びとが平等な能力を有するということは、人びとが文字通り同じ能力を持っていることを意味するわけではない。明きらかに人びとは能力的に同じではない。したがってもしかすると、ある人々は他の人々よりも、人間とそれを取り巻く世界、あるいは人間が追求すべき価値をより正しく理解しているのかもしれない。この可能性を全面的に否定することはできない。だがいったい誰が人間や世界をより正確に理解していると言えるのであろうか。どのような能力が、人間や社会のあるべき姿や目的を発見もしくは選択するのに必要な能力なのであろうか。これを言うためには、世界そのものがどのような構造になっているか、が判っていなければならない。この二つの疑問に対する人びとの考えが一致するならば問題はない。しかし人びとの意見に一致点を見出すことができないのが現実であろう。このような事態にどう対処すべきであろうか。ある特定の能力、おそらくは自分が他人より優れていると思っている能力に、あるいはたまたま現在の学校教育や社会において重視されている能力に、世界や価値の本質を把握するための能力という特権的な地位を与えることもできよう。あるいは、世界の構造、それと人間との関係はある特定のあり方をしているという前提の下に、そのあり方を知るのに適切だと思われる能力に排他的な特権を与えるべきだと考える人もいるかもしれない。例えば、世界や価値は数学的推論によってこそ理解されるような構造をしているという想定の下に、数学的能力の点で優れた人々に、人間や社会のあるべき姿の決定を委ねようとする人もいるかもしれない。これが間違っているとは必ずしも言えない。しかし契約主義者は、先の二つの疑問に関して人びとの見解が一致しない以上、世界や人間のある部分、おそらくはごく一部分を理解

する個別的な能力の点では優劣があるとしても、全ての人びとは総体としての世界や価値を理解する対等な能力を持ち、したがって社会のあり方に関して発言する対等な資格を有すると見做すべきである、と考える。

ロールズは、さまざまな価値をめぐる人びとの意見が対立し多元的であるという近代民主主義社会の現実を前提とする。このような状況に直面したとき我々の多くは、自分の信念と矛盾する意見の持主をいろいろな口実の下に、例えば、価値判断と関連性を有するかどうか不明確で能力の点で劣っていることをあげつらって議論の場から排除しがちである。しかしそうではなく、一人ひとりの人間が事柄の真偽・善悪・正邪を判定する同じ程度の能力や資格をそなえていると認めるところから彼の正義原理の探求は始まる⁽³⁹⁾。ロールズは、正当化は自明的に真であると認められる前提からではなく、相手も自分もともに受入れ認めることができる前提から出発しなければならない、と主張しているが、これはこのような大前提の下で初めて理解できるであろう⁽⁴⁰⁾。

もちろん、人びとの合意によって社会の規範や目的が確定された後は、それらの実現に必要な能力がしかるべく重視されることになろう⁽⁴¹⁾。現実の社会においては、人びとが自発的な同意を与えているかどうかは別として、社会の規範や目的がとりあえず設定され、その遂行に役立つ能力の持主が優遇されている。言い換えれば、社会は自らを維持・発展させるために、それに貢献するであろう能力の開発競争に人びとを駆り立て、そしてそれに勝ち残った人たちは声高に発言している。これが不正であるとは必ずしも言えない。しかし他方、そのような能力の点で劣っていると判定された人々は冷遇され、発言する機会は少なく、自信を失い、沈黙しがちである。だからといって、彼らが、人間や社会のあるべき姿を正しく判断する能力の点でも劣っていると考えるならば、それは誤りであろう。彼らが劣っていると言えるのは、その社会で認められた諸価値を前提とした上でのことにすぎない。

4

人びとの間にはさまざまな差異が、とりわけ能力の格差がある。したがって優れた人間とそうでないものが存在する、と考えることが全く不可能ではないにも拘らず、人間は平等な存在である、と契約論者が主張する積極的な根拠は何であろうか。ロールズは二つの根拠を挙げるであろう。第一は、近代民主主義社会に生きる人びとが共有していると思われる、人間は平等であるという信念である⁽⁴²⁾。これはそのような社会では、人びとの能力における相違が広く認識されているにも拘らず、信教や思想・表現の自由が認められ、また人種差別や奴隷制が否定されていること等に典型的に示されている⁽⁴³⁾。とりわけ言論の自由は、人間はお互いに対等な判断能力をそなえた合理的な存在である、という信念によってこそ支持されていると言えよう⁽⁴⁴⁾。この信念を人びとがどのようにして持つにいたったかが必ずしも明きらかではない、ということは問題ではない。人びとが、世界や人間に関するさまざまな事実や事情を考慮しても、これまでに判っている（と思われている）さまざまな真理を十分考慮に入れても、なおかつそのような信念を、行為を決定するもっとも根本的な要因として持ち続けるとするならば、それは少なくとも人間にとって十分に合理的なものと認められよう⁽⁴⁵⁾。

その根拠が我々の信念でしかないという点で、人間は平等な存在である、という命題はひとつの形而上学ではある。しかしロールズとしては容易には譲りがたい前提なのである⁽⁴⁶⁾。

第二の理由は、この信念が他の信念あるいは熟慮判断と一致するであろうということである。すなわち、各人は平等な存在であるという前提から合意が要請され、その合意に基づく規範が、我々が現に抱いている別の信念や道德判断と矛盾しないであろうと考えられることである。仮に別の判断と対立する場合でも、その別の判断の方を修正して、人間は平等である

という前提の下に人びとによって合意された規範は、可能なかぎりそのまま維持しようとするであろう⁽⁴⁷⁾。

誤解を避けるために繰り返せば、さまざまな価値に関する判断が対立するとき、その対立をまず社会的合意によって解決するように人びとを仕向けるものは、各人は平等な存在であるという信念である。したがって契約主義の基礎にあるのはこの人間の平等性であると言えよう。

ところが現実には、ゴティエの契約理論を論じたさいに述べたように、大半の人びとは自分のみに関わる欲求だけでなく、社会全体あるいは他人にも関わり、しかも相対立する選好をも持っている。さらに多くの場合、自分の選好こそが正しく、それに反する価値は誤っていると信じている。このような現実と、ひとり一人の人間は平等で、したがって互いに自由な存在であるという信念は矛盾しないのであろうか。

このような現実の背景が次のようなものであれば矛盾はないであろう。各人が、世界の中に正しさや善さの基準が存在するかどうか、仮に存在するとすればそれはどのような基準か、等々について判断する能力や資格を平等に有する、という信念をまず基本的な信念として持つ。そしてその信念に基づいて各人は、自分や人間の生き方、あるいは社会のあり方について自分なりの判断を下す。もちろん各人は自分の判断を正しいと信じている。したがってそれに反する判断は間違っていると考える。しかし各人の平等な能力や資格という基本的信念があるがゆえに、自分の判断の正しさは、それへの確信がいかに強いとしても、あくまで暫定的なものでしかなく、絶対的に正しいと見做すべきではない、それが真に正しいと認められるためには少なくとも他の人びとの同意が必要であると考えているとすれば、現実の対立と契約主義の前提は決して矛盾するものではない。

そのように考えているからこそ我々は、意見を異にする人々に対して、議論や説得によって相手に意見を変えさせようとするのではあるまいか。議論や説得に頼るのは、ただ単に自分の意見を力で相手に押しつけること

ができないからだけではなかろう。また我々の大半は、そのような説得の過程において、絶対に正しいと思っていた自分の判断が実は誤っており、間違っていると考えていた相手の意見こそが正しかったと気付かされたことが、しばしばあるに違いない。もしそうであれば、そのような経験は、我々は物事の認識・判断に関して同程度の能力を、もしくは同程度の能力しか持っていないことを教えるものであり、我々は平等な存在であるという信念を強めるであろう。

ところが仮に、人間や社会のあり方に関する自分の判断にきわめて強い確信を抱いており、自分の考えに反する判断を下している人間は間違っているものであり、人や世界を正しく認識する能力を欠いているのであって、そのような人間の判断は無視すべきである、と考える人々がいるとすれば(ウォルドロンはこのような人たちがこそが多数派であると考えているようだが⁽⁴⁸⁾)、そのような人たちは契約主義の主張を受入れようとはしないであろう。また、人は全て平等である、という信念を共有していない人たちも契約主義を認めないであろう。

契約主義者はこのような人々にどう対処すべきであろうか。仮想的契約 *hypothetical contract* の考えが必要となる一つの状況はこれである。人は全て平等であるという基本的信念を共有していない人をも含めて、人間は平等で自由であると契約主義者が信じるのであれば、契約にはそのような反平等論者も発言権を有する。ところが、もちろん反平等論者は合意形成には加わろうとはしない。そこで契約主義者が何らかの社会的規範の正当化を行なう場合には、そのような反平等論者が仮に契約に参加したならばその規範に同意するかどうか、をも考慮しなければならないことになる。

契約主義者の間で意見が分かれる問題のひとつに、規範の正当性の基礎となる合意は、人びとが実際に同意した契約でなければならないのか、それとも、何らかの仮想的な状況において人びとが同意するであろうと推測

される合意で十分なのか、という問題がある⁽⁴⁹⁾。私自身はマッキーと同じく現実の合意でなければならないと考えているが⁽⁵⁰⁾、多数派は後者のようである。またロールズも仮想的契約論者と一般に考えられているが、これは検討の余地があるように思われる。しかしこの問題については稿を改めて論じることにはしたい。

*

*

最初に社会契約論を体系化したホッブズが、ひたすら自分の欲求の充足に向かって突き進む人間から出発したことから、契約主義は利己的な人間を前提としている、という解釈がかなり一般的なようである。現代において契約論を復活させたロールズが、原初状態において道德原理を選択する人びとを他人に無関心であると想定したことが、この解釈をさらに強めたように思われる。しかしこれは誤解である⁽⁵¹⁾。

ゴティエの議論の検討で明きらかになったように、人間は自らの効用の最大化を目指して行為する存在であるという前提の下に、契約主義を各人の効用の観点から支持することは困難である。なぜなら、人びとが他人や社会に関わる、互いに対立する欲求や理想を有するかぎり、合意による社会において各人の効用が十分に高くなるとは言いがたいからである。また、仮に人びとの行為がそれぞれの選好のみによって決定されるとすれば、契約に基づく社会規範は、自分の選好を他人に認めさせる、あるいは押し付けるだけの能力を持たないがゆえに受入れざるをえない単なる妥協の産物でしかない。もし自分の欲求や願望をよりよく実現できる別の手段が見つければ、その手段を採用するであろうし、またそのような手段を何とか見つけ出そうとするであろう。したがって社会的合意は人びとの行為を規制する十分な力を持ちえないことになる。

契約主義者の基本的な前提は平等でなければならない。これはホッブズについても言えることである。すなわち、社会的合意が十分な規制力を持ちうるためには、各人が自らの効用を高めることにのみ関心を持つのでは

なく、まずお互いを平等な存在と考えていなければならない。しかしホッブズにおいてはこの平等は、他人を支配する能力における平等として捉えられていた。たしかに、混乱の続く市民革命の時代にあっては支配能力の平等は真実であったかもしれない。しかし今日の高度に管理された社会では人びとは必ずしもこの点で平等とは言えないように思われる。にもかかわらず、ホッブズの平等概念をそのまま引き継いだ点でゴティエの理論は失敗している。また契約主義者と対立する哲学的功利主義者も平等を全く考慮しないわけではない。だが功利主義における平等とは、同じ大きさの幸福や快樂は、それを享受する人に関わりなく全て同等のものとして扱うことを意味する平等でしかない。

現代のそれなりに安定した社会において、その基本的な社会原理や制度を人びとの合意という観点から見直すことを意図しているロールズの契約主義の根底にあるのは、さらに根本的な人間としての平等である。他の人びとを自分と同等の存在であると見做し、自分を何ら特別の存在とは考えない。したがって一人ひとりの人間が、人間や世界に関わる真偽や、あるいは行為や規範の善悪・正不正を認識し判断する同等の能力や資格を備えている、という信念が前提となっている。このような信念の根拠は容易に見出しがたいとしても、このような信念を抱きつづけるならば、他の人たちの社会的関係はお互いの合意の上にきずいていく以外に方法はないであろう。

注

- (1) B. J. Diggs, *Utilitarianism and Contractarianism*, in *The Limits of Utilitarianism*, eds. by H. B. Miller et al., Univ. of Minnesota Press, 1982, p. 105.
- (2) 藤原保信『自由主義の再検討』, 岩波書店, 1993 年, 17-21 頁.
- (3) Amy Gutmann, *Liberal Equality*, Cambridge Univ. Press, 1980, pp. 32-3.
- (4) John C. Harsanyi, *Morality and the Theory of Rational Behavior*,

Social Research, Winter, 1977.

- (5) 塩野谷祐一『価値理念の構造』, 東洋経済新報社, 1984 年, 236 頁.
- (6) T. M. Scanlon, Contractualism and utilitarianism, in *Utilitarianism and beyond*, eds. by A. Sen et al., Cambridge Univ. Press, 1982, pp. 108-11.
- (7) 選好については山内友三郎『相手の立場に立つ』, 勁草書房, 1991 年, 123-4 頁参照.
- (8) 他の注に引用するものは除いて, 関連する中心的な著作は次の通りである.
Jan Narveson, *The Libertarian Idea*, Temple, Univ. Press, 1988. M. ブキャナン『自由の限界』, 加藤寛監訳, 文眞堂, 1977 年. Gilbert Harman, Relativistic Ethics: Morality as Politics, *Midwest Studies in Philosophy*, Vol. III, 1980. ハーマンを契約論者, 特に規範的契約論者と見なすことには異論もあるがハンプトンもそのように解釈している. Jean Hampton, Two faces of contractarian thought, in *Contractarianism and Rational Choice*, ed. by Peter Vallentyne, Cambridge Univ. Press, 1991, p. 32.
- (9) 前注と同じく, Robert Nozick, *Anarchy, State, and Utopia*, Basil Blackwell, 1974. Jeffrey Reiman, *Justice and Modern Moral Philosophy*, Yale Univ. Press, 1990.
- (10) ゴティエの理論の概要については次のものを参照されたい. 森庸「社会契約としての道徳」, 『哲学』, 第 95 集, 1993 年, 慶應義塾大学・三田哲学会.
- (11) David Gauthier, Why contractarianism? in *Contractarianism and Rational Choice*, pp. 19-20.
- (12) *ibid.*, pp. 22 f.
- (13) D. Gauthier, *Morals by Agreement*, Clarendon Press, 1986, p. 17, pp. 231-2. 以下, MA と記す.
- (14) MA, pp. 316-29. D. Gauthier, The Social Contract: Individual Decision or Collective Bargain? in *Foundations and Applications of Decision Theory*, Vol. II, eds., by C. A. Hooker et al., D. Reidel Publishing Co., 1978, p. 47.
- (15) MA, pp. 230-1.
- (16) Jan Narveson, Gauthier on distributive justice and the natural baseline, in *Contractarianism and Rational Choice*, p. 148.
- (17) MA, pp. 190-1 の寓話をこのように解釈できよう.
- (18) C. W. Morris, The Relation between Self-Interest and Justice in Contractarian Ethics, L. Thomas, Rationality and Affectivity, both in

- Social Philosophy & Policy*, No. 2, 1988. Peter Vallentyne, Contractarianism and the assumption of mutual unconcern, in *Contractarianism and Rational Choice*.
- (19) D. Gauthier, Morality, Rational Choice, and Semantic Representation, *Social Philosophy & Policy*, No. 2, 1988, pp. 213-7.
 - (20) D. Gauthier, The Social Contract, pp. 56-7.
 - (21) J. Rawls, The Idea of an Overlapping Consensus, *Oxford Journal of Legal Studies*, Vol. 7, No. 1, 1987, pp. 10-2.
 - (22) J. L. Mackie, *Ethics*, Penguin Books, 1981, Chap. 1. G. Harman, Is There a Single True Morality? in *Morality, Reason, and Truth*, eds. by D. Copp et al., Rowman & Allanheld, 1984. J. M. ブキャナン他『立憲的政治経済学の方法論』, 深沢実監訳, 文眞堂, 1989年, 74-85頁.
 - (23) D. Gauthier, Why contractarianism? pp. 16-22. なお, 目的論的自然観と道徳秩序の関連については次のものを参照されたい. 藤原保信『政治理論のパラダイム転換』, 岩波書店, 1985年, 第IV章.
 - (24) John Rawls, Justice as Fairness: Political not Metaphysical, *Philosophy & Public Affairs*, No. 3, 1985, fn. 19. 以下, 'Political' と記す.
 - (25) J. Rawls, The Idea of an Overlapping Consensus, pp. 4-5.
 - (26) 但しロールズはこの二つの理想を並列的に表現する場合もしばしばある. J. Rawls, Kantian Constructivism in Moral Theory, *The Journal of Philosophy*, September, 1980, p. 520. 以下, 'Kantian' と記す.
 - (27) Jean Hampton, Should Political Philosophy Be Done without Metaphysics? *Ethics*, July, 1989, pp. 791-9.
 - (28) R. J. Arneson, Symposium on Rawlsian Theory of Justice-Recent Developments: Introduction, *Ethics*, July, 1989, pp. 696-8.
C. Kukathas & P. Pettit, *Rawls: A Theory of Justice and its Critics*, Stanford Univ. Press, 1990, esp. chap. 7.
 - (29) Charles Taylor, Atomism, in *Philosophical Papers 2*, Cambridge Univ. Press, 1985. Jeremy Waldron, Theoretical Foundations of Liberalism, *The Philosophical Quarterly*, April, 1987.
 - (30) M. G. Singer, Justice, Theory, and a Theory of Justice, *Philosophy of Science*, December, 1977, pp. 612-5.
 - (31) 'Political,' p. 230.
 - (32) J. Rawls, The Independence of Moral Theory, *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 48, 1975.

- (33) 'Kantian,' p. 521, p. 543. 'Political,' pp. 242-3.
- (34) 'Political,' p. 233, pp. 240-1.
- (35) ドゥオーキンもロールズの契約理論の根底にあるのは自由ではなく平等であるとしているが、何に関する平等かの点で私とは若干異なるように思われる。R. Dworkin, *Taking Rights Seriously*, Harvard Univ. Press, 1977, pp. 177-82.
- (36) J. Rawls, Justice as Fairness, *The Philosophical Review*, 1958, pp. 181-3. *A Theory of Justice*, Harvard Univ. Press, 1971, p. 19.
- (37) J. Rawls, The Domain of the Political and Overlapping Consensus, *New York University Law Review*, No. 2, 1989, p. 216.
- (38) J. Rawls, *A Theory of Justice*, pp. 507-8.
- (39) J. Rawls, The Domain of the Political and Overlapping Consensus, pp. 234-8.
- (40) J. Rawls, *A Theory of Justice*, pp. 577-8, pp. 580-1. J. Rawls, The Idea of an Overlapping Consensus, p. 6. 大庭健も正当化の方法に関して同じ立場に立っているように思われる。大庭健『はじめての分析哲学』, 産業図書, 1990年, 239頁。
- (41) J. Rawls, *A Theory of Justice*, pp. 506-7.
- (42) この点は1980年以後の諸論文において繰り返し述べられている。例えば, 'Kantian,' pp. 517-8.
- (43) J. Rawls, *A Theory of Justice*, pp. 19-20. 'Political,' p. 228.
- (44) Thomas Scanlon, A Theory of Freedom of Expression, *Philosophy & Public Affairs*, Winter, 1972, pp. 214-8.
- (45) J. Rawls, The Independence of Moral Theory, p. 8. またこれはブランドの合理性の概念とも共通している。R. B. Brandt, *A Theory of the Good and the Right*, Clarendon Press, 1979, pp. 10-6, pp. 152-9.
- (46) J. Rawls, The Idea of an Overlapping Consensus, p. 14. Jean Hampton, Should Political Philosophy Be Done without Metaphysics? pp. 807-14. 但しハンプトンは、人間は平等であるという信念は人びとに共有されてはいないと見做している。
- (47) 道徳原理選択の手続きに関しては次のものを参照されたい。森庸「ロールズにおける道徳原理とその正当化」, 『哲学』, 第88集, 1989年, 慶應義塾大学・三田哲学会, 93-8頁。
- (48) J. Waldron, op. cit., pp. 145-6.
- (49) この問題については次のものがかなり詳細に論じている。J. Waldron, op.

契約主義の二つの根拠

cit., pp. 138-46. Jeffrey Reiman, op. cit, pp. 73-8.

- (50) J. L. Mackie, Rights, Utility, and Universalization, in *Utility and Rights*, ed. by R. G. Frey, Univ. of Minnesota Press, 1984, p. 100.
- (51) ロールズのこの想定については、森庸「ロールズにおける道德原理とその正当化」, 89頁参照.